第399号
平成30年
8月10日

すまいるたうん

発行元
東京新聞
南千住東口専売店
TEL5850-3699
発行責任者
鬼塚　佳代子
TEL090-2657-0300

お疲れ様です。ありがとう。西日本豪雨災害支援派遣で似島（にのしま）へ

「西日本豪雨災害支援派遣で似島（にのしま）へ行って来ました。」

7月27日から一週間、広島県南区災害ボランティアセンター似島サテライトへの支援派遣に行って来た荒川区社会福祉協議会 地域コーディネーター稲葉隆裕さんに体験談をお聞きしました。

似島は、東京から新幹線で広島まで4時間、そこから市電で40分で広島港へ、フェリーで20分の場所にあります。バームクーヘンの発祥地、「安芸の小富士」が有名な広島市最大の島です。

人口806人、504世帯（平成30年5月末現在）ですが、高齢者施設や児童養護施設在住者も入っておりますので、実際はこの数字より少い居住者となります。学区フリーなため、自然の中で学ぼうと広島市内からフェリーで通学して小中学生が多くいます。

「リュック背負って長靴で」

豪雨災害が起きた2日後にはボランティアに20人、翌週の15日の日曜には367名が参加し、延べ2603名の方が参加されております。（7月28日現在）広島県内の方が多く、大阪など近県からもいらしています。

土砂災害に遭った似島は、信号機はなく、バスもタクシーも走っていない島です。重機が入らない狭くて曲がった道路が多くあります。子どもたちの通学路も土砂被害に遭い、通行止めとなってしまい、迂回して通学していました。土砂により、海まで流された家や、流されて下の家でぶつかって止まっていた家もありました。

ボランティアの方は指定された場所まで行き、土砂を土嚢袋に詰める作業や土嚢袋を一輪車で運ぶ作業等の手作業を行います。熱中症のことに配慮して午前中活動して、似島サテライトとなっている公民館へ戻って来ます。

「地元の方と一体になって」

地域おこし協力隊、地元の社協職員などの方々が中心となり、日々復旧に向かっています。子どもたちは戻って来た方たちにタオルや飲み物を渡したり、ボランティアの方たちが動き易いように、それぞれができることを行っておりました。戻って来た方たちは、洗い場でスコップなど洗います。靴底にへばりついた粘土質の土をブラシで落とすことを手伝ったりしました。フェリー会社もボランティア参加者の運賃を無料にしておりました。

「ありがとう。お疲れ様です。」

命の危険を伴う猛暑の中、日陰のない場所での肉体労働は過酷です。この言葉が飛び交う中、凄くパワーを頂きました。と参加者の方は話しておりました。感謝と労いの言葉は、また活動に参加しようとする原動力となります。

皆さまから頂いた義援金支援金は、こうした活動に生かされています。まだまだ、被災地では被災前の日常には戻っておりません。

土砂出し作業は8月末までに終了し、今度は生活支援と代わって行きます。